

令和五年八月吉日初版作成

真の自我の確立

高嶋善三郎

目 次

- 真の自我の確立・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 真実の自己と現われの自己・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- 生命の本源の世界にまで入っていく方法・・・・・・・・ 5

お 願 い

既に作成した資料（バックナンバー）は、ウェブサイト『白光北陸』のブログ欄に掲載しています。

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

次の連絡先をお願い致します。

（スマホ） 090-3334-6619

（メールアドレス） zensan@peach.ocn.ne.jp

眞の自我の確立

過去ある法友から、「自分の業生は、自分で消すのですか」という質問がありました。これに対して答えを五井先生著の『神は沈黙していない』を中心に整理していききたいと思います。

自分とは、どういう存在で、どうあるべきかについては、古来からいろいろな人たちによって、探究されてきました。古代ギリシャの哲学者であるソクラテスの「汝自身を知れ」や中国春秋戦国時代に活躍した、論語で有名な孔子や道德経で知られる老子によって、人間はどうあるべきか、人間の通るべき道について究明されてきました。日本は、これらの示された道をもとに、教育されてきました。ところが、明治維新以降、文明開化の旗印のもと、個人の尊厳と自由を尊重する、西洋の個人主義的な考え方が、輸入され、強い国家権力が否定された第二次世界大戦後、その考え方は、急速に広まっていきました。

戦後二十数年後の昭和四十年代前半、五井先生は自我の在り方について次のように解説されています。

「大学から小学校に至るまで、自我を出すこと、自分を出すこと、自我の意見を発表することをすすめられ、その当時の東大総長の学生への講話の中にも、自我の確立についての話が中心になっていて、福沢諭吉のように、いかなるときでも自己を曲げずに生きられる人間になることを、すすめていたことが、新聞報道されていることに対して、次のように解説されています。

本心の現れそのものを自我というのであれば、それは自我をそのまま出すことが大事であり、必要であり、そうした自我であれば、お互いの自我がぶつかり合うようなことは、絶対になく、お互いがお互いのためになり合うように自然になってゆくが、自我を出し合うことになって、お互がぶつかり合い、争い合うような、手前勝手な自我であっては、世界人類全体のためにはならない。

そのためには、自我を出すことをすすめる前に、自我というものが一体どういうものなのか、どういうところから生まれ出ているのかを先に教えなければ、つい、自分勝手な主張をし、自分勝手な行動を強く推し進めてゆくことを、自我の確立であると思い込んでしまう。

昔は自我を出すという教育がなされていたが、出してはいけない自我というのは、本心（神）から外れた、いわゆる業想念的喜怒哀楽のこ

とであり、こつした自我、眞実は自我ではなくて、業想念欲望であり、自分勝手な欲望想念行為である。こつという想念行為をも、思い思いに勝手に出し合うことをすすめているようでは教育の実体がなくなる。

これは、眞の自我というものが、神の真心の中にあるものであって、肉体人間の頭脳の中から湧き出でてくるものでも、肉体人間としての環境からうまれてくるものではない、ということ知らぬところから起って来る。」とされています。

そして「自分の正しさを計るハカリは、宇宙の根本原則、大生命の法則によってなさねばならない。この世や国家の定めが幾たびとなく変更されても、宇宙の根本原則には変わらない。そして根本原則、大生命の法則とは、一口で言えば、大調和ということであり、あらゆるものが大調和にむかって進んでゆくということである。」説明されています。

以上から、「自分の業生は自分で消しているか」を判断するには、自分が本心の自分なのかどうかにかかっています。業生を消していくには、本心と一体となって強力な神の光をうけ、肉体意識側で個々人が自分の業生を反省し否定することが必要です。本心（神）から外れた、いわゆる業想念的喜悦哀樂の自分が業生を消せるわけがないです。

また二度としないと反省して消してゆかなければ、光を受け、消えたとしてもそれは一時的なもので、決して業生は消えてゆかないのです。私達は、五井先生から、神と人間の関係について教えられ、神の働きに沿った生き方「消えてゆく姿で世界平和の祈り」を実行しています。その中で業生とは何か、それをどのように消していくかというより、手放していくかが示され、それに取り組んでいます。そしてその実践を通して神の働きを自分のものとして、また宇宙神から直接神聖の光を世界平和の実現のため降ろしています。それ故、「自分の業生は自分で消している」ことになるのです。

業生は自分では消せないとされる方の考えの背景には、五井先生のみ教えである、人間と神との関係が理解できていないため、罪深い凡夫の自分が業生を消すことは出来ないという思い込みがあったのでしょう。確かに過去悟りに入るには、神霊のご加護を信じ、どのような困難にあっても、感謝して業生を消していただくという他力本願的な全託の方法が主流を占め、座禅という自力本願的瞑想方法もありましたが、念力となり、悟りには入ることは極めて難しかった事情があったようです。

眞実の自己と現われの自己

老子講義の第十四講「自らを知る者は明なり」においては、前項で言われている二つの自我は、頭で知る、頭脳知識で知る、頭脳に残っている体験で知る自我と、本心で知る、霊的に知る自我というように表現されています。そして人を知るのは、前者の智でもできるが、想いを静め、心を深めて、じっと生命の本源の世界にまで入ってゆかないと、真

実の自己と、現われの自己との区別をはっきりつけて、真実の自己、大生命の分生命である自分というものを知ることができない。そういう境地になることを明（めい）といい、明といわれる程の心境は、文字のとおり、日の陽つまり＋（プラス）と、月の陰つまり－（マイナス）との大調和の姿を示したものだ。日月も肉体人間の手のとどかぬ、高い高いところにあり、高い高い、深い深い、奥の奥の世界、自然の本源の世界における、大調和の相すがたを現わしている。即ち明の境地というのは、宇宙神のみ心の中に入りこんだ境地、微塵も自我、小我の無い境地、澄み極まった心境をいう。こういう心境でないと、あらゆる業想念波動を超える程の強い意志力は、やはり現われないと言われているのです。

そして真実の自分を知りはじめる、すべての想念行為は正しくなり、自由になり、他人の言に左右されたり、地位や物質や情愛で動かされた

りすることがなくなり、神のみ心のまま、本心そのままの行爲ができるようになる。如何なる環境にいても、足ることを知り、心富める者になれ、何事にも全力を挙げてぶつかってゆけると言われています。

神はこういう人を、志有る者として、天命を成就させるのであると解説されています。

生命の本源の世界にまで入っていく方法

私達神人は、明というほどの心境になり切れていなくとも、その心境を目指している存在であり、神と人間の関係を正しく理解し、想念を常に物質世界の中に置かずに、神のみ心の中に入っていくこと、努力しています。あとは、その場その場で守護の神霊や救世の大光明や宇宙神が私達のいたらぬところは補ってくれています。

そこで、生命の本源の世界にまで入っていく方法について、五井先生から示されたものを改めて整理してみましよう。

まず本心の本質について理解する必要があります。

本心については、神聖とも表現されているものです。

「本心（神聖）」とは、大自然の根源の働きをする生命を、その智慧能力で、大調和達成のために生かききってゆく働きである。この神本来の神聖の世界は、愛深き心、美しく清らかな心、真をつくす心、善事をなす心等々、すべて人間生活を高め、深める心のひびきの世界なのである。」（『続宗教問93』）

また「本心（神聖）」は、私達の肉体人間の外にあるのではなく、チャクラを通して脳天（第七のチャクラ）において、肉体以外の体、つまり幽、霊、神と仮に呼んでいる各階層の体につながっている。

神霊の階層の心の波動が、そのまま素直に肉体の脳天に伝わってきている心を本心（神聖）と呼ばれている。本心（神聖）は自分の頭の中や心臓の辺にあるのではなく、神のみ心と一つのことにあるのである。

しかし肉体人間の脳天（第七のチャクラ）が神界以外の階層即ち幽界から伝わってきている波動に蔽（おお）われてしまうと、神霊の心そのままの働きはできなくなるのである。そのような時業想念で本心（神聖）を求めても、本心（神聖）を自己のものとして、つかむことはできない。

業想念波動を消滅したところから、本心（神聖）は現れてくるのである。（『愛するということ』）と五井先生は言われています。

生命の本源の世界にまで入っていくには、脳天（第七のチャクラ）に

おいて、肉体以外の体、つまり幽、霊、神と仮に呼んでいる各階層の体につながっていることを意識し、常に各チャクラを活性化し、業想念に影響を受けない状態にすることが不可欠なのです。

次に本心（神聖）の働き方を理解することです。

私達が何を選択するか、また何に意識を集中するかによって、それらを実現するために瞬時にエネルギーを注いでくれることを知ることです。良い選択等をすれば、いい結果が実現されますし、一方神のみ心から離れた選択等をすれば、不調和の姿をそのまま現わします。

また私達の発する言霊に答えて、私達の望む姿を現わしてくれます。

例えば、日頃理由もなく怒り、悲しみ、苦しみの感情がおきるのは、私達の幼児の時から無意識のうちに受け入れてしまった、自分の周りの人たちの肉体界の二元対立や自己中心的価値観によるものです。この価値観や健康上の問題点などを手放したい時、本心の働きを意識しながら「〇〇を手放す」という言霊を発することにより、それを実現してくれます。手放せば、それらの業想念はすべて光となって消えてゆき、自分の内に眠っていた、各種の智慧や能力を目覚めさせることができることになるのです。